元気っ子　Ｎｏ298 ながさわ保育園

園　長　　中　瀬　弦　偉

先月の元気っ子では、「保育所保育指針」の序章に書かれていること、またそのための保育には発達の結果だけではなく、環境を通して行われるそのプロセスを大切にしていることを書かせて頂きました。

それでは、小学校以降の教育について、文科省はどのように考えているのかを見ていきます。文科省のＨＰに「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について（最終報告）」というものが掲載されています。その中の schools for the future、「未来思考」で実空間の価値を捉え直し、学校施設全体を学びの場として創造するという章があります。その視点を要約すると、「学校施設の構成はこれまでの固定観念から脱し、施設全体を学びの場として捉え直す必要がある。また、教室環境も単一的な機能・特定の教科等に捉われず、教科横断的な学び、多目的な活動に柔軟に対応していく視点と画一的・固定的な姿から脱し、時代の変化、社会的な課題に対応していく視点をもつ必要がある。」となっています。この「学校施設という環境全体を学びの場へ」と転換していく考え方は、保育の現場が「環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている」ことから共通の考え方だと言えると思います。

この最終報告が文科省のＨＰに掲載されたのは３月なのですが、現在、社会は少しずつコロナ後のことを考え始めているということが伺えます。また、内閣府から出されている「Society5.0 の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」には以下のように書かれています。

子供の認知の特性を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「そろえる」教育から「伸ばす」教育へ転換し、子供一人ひとりの多様な幸せ（well-being）を実現するとともに、一つの学校が全ての分野・機能を担う構造から協働する体制を構築し、デジタル技術も最大限活用しながら、社会や民間の専門性やリソースを活用する組織（教育 DX）への転換を目指す。これを実現するためには、皆同じことを一斉にやり、皆と同じことができることを評価してきたこれまでの教育に対する社会全体の価値観を変えていくことも必要となる。

とあります。このように日本をはじめ世界的にもコロナ後の新しい時代へと動き出しています。遠い未来の話のように感じられるかもしれませんが、元々、保育というのは常に先を見据え、数年後の社会を担う子どもたちを相手にする仕事です。そんな意識で日々の保育を考えています。この政策パッケージの最後には「保護者・国民の皆様へ向けて」と題し、以下ように書かれています。

これらの施策は、大人の頭のなかにあるかつての自分が受けてきた教育とは異なるため、それが一つ一つ実現されていくにつれ、不安や違和感が生じるかもしれません。－（中略）－新たな学びに挑戦する、学校や子どもたちへのご理解・ご協力をよろしくお願いします。

いつか保護者の皆様ともこんなお話を語り合える機会を設けられたらと強く思います。